に見え、真珠と戯れる龍の図、「龍戯珠（ロンシージュ）」のイメージを持つようになった。龍戯珠は中国の伝統的な、めでたいとされる図柄である。このような見方から、人々が、建物に対して、好感と高評価を持っていると言える。あるいは、糖葫芦（タンフールー）（串刺しの菓子）のようだという見方もあるそうである。糖葫芦は、中国の特産品の１つであり、見た目も味もよいお菓子である。このような見方も「中国風」というイメージが現れている。

同じようにタワーを例にすると、東京スカイツリーは 2012 年に建てられ、高さは 634m であり、今現在、世界一高いタワーである。東京スカイツリーの足元は三角形になっており、上にいくほど細くなり、円柱の形になる。タワーの構造は日本の国宝の１つである“五重塔”に似ていて、主に地震と強風を防ぎ止めることに効果的だそうだ。夜になると、トップと２つの展望台がライトアップされ、白い光で照らされると、まるで日本を象徴する富士山の山頂の積雪を思わせる。

東京スカイツリーの設計には、モデルとなったものが存在したのだろうか。大地に突き刺している日本刀であるという説もある。確かに日本は武士の伝統が長く、刀はサムライ精神を最も体現しているとも言える。設計者が無意識に刀のイメージを取り入れたとしても理にかなっているのではないだろうか。実際、東京スカイツリーの外観も、刀のシルエットが確かにある。また、日本の伝統人形である“こけし”の形とも似ているような気がする。それは丸い頭と細い体の形をしており、長いスカートの形がスカイツリーのシルエットに似ているようにも見える。

一方、上海博物館については、中国古来の天文学における宇宙構造論の理念を受けている。また遠くから見ると、中国伝統の青銅器のようでもある。

そして、江戸東京博物館については、現代的な鉄筋コンクリート構造だが、単に形だけからみると、まるで弥生時代における高床式倉庫のようである。

このように、近代建築は、機能を重視するだけでなく、魂を持った独自のスタイルが求められる。このため、近代建築が、多かれ少なかれ伝統文化の中からそのインスピレーションを吸収し活かすことにより、その建築物を見た人々は、より多くの文化的要素を感じ取ることができるのではないだろうか。

近世日本の尼寺：「駆け込み寺」東慶寺と「比丘尼御所（びくにごしょ）」制度

Nicolette Lee
（ブリティッシュコロンビア大学）

2012 年 12 月 3 日から 22 日まで、私は神奈川大学非文字資料研究センターに訪問研究員として在籍した。この研究機会を通じて修士論文の資料を見つけることができ、非常に有益な経験であった。

1. 研究テーマ

私の研究テーマは、近世日本の尼寺である。このテーマに関心を持つようになったのは、江戸時代に宗教を実践していた主な女性たちについて研究を始めたときだった。私は「縁切り寺」の尼僧、皇女などが住持する尼寺「比丘尼御所」の尼僧、そして有名な「熊野比丘尼」について簡単に考察し、権力と尼僧たちの人脈との関連性が根底にあるテーマであることを確認した。私が特に注目したのは、女性同士の交流の重要性である。尼僧たちは皇女などの平信徒に手を差し伸べ、彼女らの尼寺を支援し、布教活動を行った。この研究を進めるなかで、私は焦点を上流階級における尼寺制度である「駆け込み寺」と「比丘尼御所」の２つに絞り込んだ。これら２つの制度に焦点を絞る一方で、尼寺の制度的詳細に注目することで、尼寺の自律的地位について分析しようと試みた。そこからわかったのは、尼寺および尼僧への敬意や評判が、彼女たちの政治的・経済的権威を補完するある種の通貨のような役割を果たし、尼寺に幕府および朝廷と同等の権力と影響力を持つことを可能にしたということである。

2. 調査訪問の目的

調査訪問に先立って、駆け込み寺と縁切り寺に関しては、英語による研究資料を入手していた。特に鎌倉の東慶寺は、江戸時代に幕府から公認された２つの縁切り寺のうちの１つとして有名な寺なので、資料を見つけることができた。しかし比丘尼御所の制度については、注目

に値する資料がなかったため、尼寺には必ずしも関係のない仏教美術に焦点を置いた美術史的研究法による資料から推論を引き出すしかなかった。そこで調査訪問の主要な目的の１つには、比丘尼御所に関する日本語での研究資料を出来る限り集めること、そして縁切り寺と東慶寺についてより詳しい情報を集めることであった。調査訪問のもう１つの目的は、近世日本の仏教における女性について研究している教授と面会する機会を持ち、助言を求めることであった。

3. 調査訪問の成果

資料を集めることが調査訪問の主要な目的であったが、研究分野の教授と面会できたことが、結果的にはより大きな収穫となった。調査訪問の最初の週末、非常に幸運なことに、私は東慶寺で高木侃（ただし）教授とお会いし、話を伺う機会を得た。高木教授は江戸時代の「離縁状」に関してこれまでに多くの論文を執筆されている。また法制史と併せて、幕府公認の２つの縁切り寺である鎌倉の東慶寺と群馬の満徳寺についても研究されている。高木教授からは、研究資料に関する助言を頂き、さらには出版されているご自身の研究資料を頂いた。英語の研究資料だけで東慶寺について十分な研究を行ったつもりでいたならば、私は大きな間違いを犯すところだった。私はこの面会の機会が得られたこと、そして新たな資料を入手できたことを嬉しく思う。

次に、比丘尼御所制度の研究に関して、私は京都と神戸に小旅行をし、近世の比丘尼御所研究の分野で第一人者である方たちに会いに行った。京都では、尼寺大聖寺の支院である大歓喜寺の中にある中世日本研究所で、２人の研究者にお会いした。神戸では、ある大学教授にお会いした。教授は２つの比丘尼御所について掘り下げた研究を行い、比丘尼御所制度全般について、また２つの比丘尼御所のうちの１つの人的構造について、全般的背景知識を提供されている。

全体として、この学術交流は私にとって非常に素晴らしい機会となった。この交流は私の研究の方向性に大きな影響を与えるものであった。私はこれからも駆け込み寺と比丘尼御所の基礎構造について分析・詳述するというテーマを追究し続け、近世日本の仏教および女性に関する研究に貢献していきたい。

念願の日本コロムビア訪問

Caroline Boissier
（パリ第７大学）

こんにちは。フランスから来ましたカロリーヌ・ボアシエと申します。パリ第７大学の６年生です。私は日本の音楽産業について研究しています。博士論文は、日本コロムビアというレコード会社についてですが、フランスの図書館ではなかなかそれに関する書籍等を見つけることができません。今回、研究者として、非文字資料研究センターを訪問する機会に恵まれましたので、論文を書き上げる道筋が見えてきました。

日本コロムビアという会社は、日本では一番古いレコードレーベルになります。論文を書き上げるにあたって、私は、日本コロムビア社の歴史と、レコードのテクノロジー発展が重要なポイントだと思っていますが、テクノロジーに関する研究は難しいのではないかと思いました。そこで、滞在の最後の研究発表に向けて、特にテクノロジーの発展について調査したいと思いました。

まず、神奈川大学に来る前に、私はフランスから、日本コロムビア社に手紙を送りました。社史なども含む質問も書かせていただきましたが、うまく伝えられなかったかも知れません。

そこで、私は非文字資料研究センターに到着して、先生やチューターとお会いした際に、そのことも含め、私の研究について相談しました。先生方からは、いくつかアドバイスもいただき、日本コロムビア社に関する質問については、訪問前に少し修正していきましょうとご提案くださいました。

そして、ついに、日本コロムビア社を訪問する日がやってきました。日本コロムビア社の方々は、一生懸命私の質問に答えようとしてくださいました。私の質問が複雑だったため、多くの書籍の中から答えを探そうとしてくださいました。また、そこでは、最古の機械から最近の機械まで、様々な機械を見せてくださいました。スタジオで、レコードの録音風景も見学させていただいたので